

周延作「諸色峠谷底下り」を読み解く

共立女子大学教授 阿部 恒久

「しよしきとげたにぞくだ諸色峠谷底下り」は1883(明治16)年2月に刊行された3枚続きの錦絵で、作者は明治浮世絵界を代表する作者の一人である楊州周延ちかのぶ(1838-1912)。本名は橋本直義で、越後高田藩士の子として江戸で出生した。浮世絵を歌川国芳・三代目豊国・国周らについて修業。「千代田の大奥」に代表される風俗画や美人画など多くの作品がある。

実物は、縦35.5cm、横69.5cmの大きさ。『図説日本史通覧』p.216に掲載の絵は小さくて台詞が読めないが、これは小西四郎『錦絵 幕末明治の歴史 9(鹿鳴館時代)』(講談社、1977年)に見開き2ページで収録されており、台詞を読むことができる。

1881年10月大蔵卿に就任した松方正義の主導で、高いインフレ状態の是正をめざし、「紙幣整理」の名の下、デフレ政策が強引に展開された。影響はただちに現れ、多くの物価が急落し、民衆を苦しめる。以下、この絵をいくつかの部分に分けて読み解いてみよう。

① 表題「諸色峠谷底下り」のすぐ左下の部分で、崖から落下している図が二つある。一つは「小間物／細物」で、「こうつきをとされてはたまらぬ」の台詞がある。もう一つは「かみくず」で、「いかにくずだとしてあまりひどい〜」と言っている。これらは、最もデフレの影響が大きかったのであろう。

② 絵の左下に注目しよう。谷底に続く道の先端にいるのは、魚の「するめ」、「干物」、「たこ」、「まぐろ」、そして「材木」。これらもデフレの影響が大きいのであろう。

③ その後ろを「玉子」、「かつをぶし」、「きぬ」、「砂糖」、「生糸」、「米」、「石油」、「ランプ」、「大豆」、「小豆」など多くの品目が続く。ほとんどの図が擬人化され、頭部が商品で描かれているなかで、例外的に人間の顔が描かれているものがある。それは「田地持」の地主と「小作人」で、下落する「米」を追いかけて、地主は「これ〜そう下りられてはたまらぬ〜」、小作人には「だんなよりをれがたまらぬま[い]つ

た〜」と言っている。また、「生糸」には「これではとてももちこたへられぬ」との台詞がある。

④ 中央上段の橋では、「かわら」と「ブリキ」が刀を交えている。デフレのなかで、屋根葺同士が競合したのであろう。「かわら」は「そこうごくきないたのねとめてくれん」と言い、「ブリキ」は「なんのこしやくな」と応じている。また、橋の下には、両者の対立から蹴落とされた「屋根板」が「いやはやひどきめにあふたあいた〜」と嘆いている。さらに、右手の崖の上には「左官」、「石屋」、「大工」がそれらを含め周囲を眺めている。住宅建築関係は少しは余裕がありそうだ。

⑤ 橋の左側にある高台では、デフレの影響をあまり受けていない業種が描かれている。「茶」、「酒」、「そば」、「ゆや(湯屋)」、「しるこや」、「こよミ」などである。

⑥ 絵の右下から左上にかけたこがあがっている。たこには「ハガキ」と書かれ、それをあげている郵便配達は「たいそうよくあか[つ]た」と言う。1873年に郵便はがきが登場したときの料金は0.5〜1銭だったが、1883年1月から一律1銭になったことを表現しているのであろう。

以上がおもに擬人化された諸物価の読み解きであるが、もう一つ触れたいことがある。それは、絵の上部の遠景に、鉄道馬車・蒸気機関車・西洋帆船(軍艦?)が描かれていることである。何のためにこれらを描いたのか。西洋文明的なものはデフレの影響をまったく受けていない(料金等は変わらない)ことを示したかったのであろうか。

この錦絵が刊行されたあとも、フランスでの株価暴落をきっかけとした恐慌の波が1884年に日本に波及し、デフレをいっそう深刻にした。また、1882年の壬午事変を背景に対清戦争に向けた軍備拡充が始まり、その財源を得るために酒造税などの増税、醤油税などの新設が行われるため、民衆の生活はいっそう苦しさを増していくことになる。